

炉辺医話

外気功との関わり

板橋中央総合病院血液浄化療法センター

阿岸鉄三

<外気功との出会い>

この始まりは、確か 1993 年の春、一人の医師が気功士を筆者の前勤務先の東京女子医大へ連れてきたことである。筆者が興味を示すであろうことを予測してのことであつたらう。手掌を患者の側頭部にかざすと、患者の全身が温かくなるという。そんな馬鹿な。そんなことは、現代生理学の本には書いていない。なにかからくりがあるに違いない。ちょうど、高脂血症のある閉塞性動脈硬化症(手足が冷たく感じる)患者を LDL 吸着で治療していたので、試みてもらうと、患者は体が温かくなり気持ちがいいという。ええ、どうして? 本当に体が温かくなるのなら、サーモグラフィで変化が捉えられるのではないか。そして局所の血流の改善も得られ

ているのではないか。そこで、約 100 回の外気功の際に、患者の自覚症・四肢皮膚表面のサーモグラフィ・容積指尖脈波・ドップラーエコー血流計による血流測定をしたところ、70~80%の場合に陽性の所見が捉えられた。驚いたことに、3.2 も足の温度の上がった人もいたのである。他覚的・客観的に、人間が外気功に反応したと認めてもよいのではないか。実際、その場においても信じがたく、自分で体験してみてもやっと納得という状態なのである。そこで得た一時的な結論は、われわれが知っている現代医学の生理学には理解されていない生体の活動というものがあるということであった。さらに、驚いたことには、気功士の真似をした筆者の手をかざすという行為に、患者が反応、あるいは、感応するようになったのである。

< 外気功の臨床的効果 >

そのうち、子細に観察すると、次のようなことが判った。まず、患者に椅子に腰掛けてもらい、両手掌を患者の側頭部

にかざすと、他覚的には、数十秒のうちに、80~90%の患者の 1)上半身が前後・左右にリズムカルに揺れる、一方向に傾く、あるいは、グルグルと円を描くように廻る、2)皮膚が露出している顔面から手足が紅潮、さらに発汗、3)唾液を飲み込むしぐさをする、4)反応のある患者の約半数は、手掌をかざすことを止めても、この状態が継続する、5)強制的に止めるには、顔の前で拍手をすると眠りから醒めるように、ビクッと醒める、6)少数の患者では、大腿上に置いた手、床にある足を力の入れ方を忘れたように動かせなくなり、拍手で醒めると手足も動かせるようになる。

一方、患者の自覚的には、1)頭の中が軽くグルグル廻る感じ、2)上半身の動く感じはあるが、心地よく止めたくない、3)顔面から躯幹、さらに四肢に温感が広がる、4)心地よく眠くなる、安らか、穏やかな気持ちになる、5)醒めると、爽やか、和やかな気分である、6)このような状態は、人により1日から1週間ほど継続する、7)精神状態、あるいは霊性とも

呼ぶべきものにも影響し、繰り返すうちに、元気になる、明るくなる、自分以外のものに優しい気持ちで接するようになるなどの効果がある。

< 外気功の検索 >

このような効果を医療に応用できないかというのである。しかし、近代西洋医学を学んできた身にはなんとも奇妙であり、理解できない。そこで自身の納得のため、気功、およびそれに関連する領域の出版物を手当たり次第読み始めた。当然のことながら、まず、検索の常套手段として、医学中央雑誌の過去5年分(当時から)の文献検索をしたが、それに相当するらしいものは見当たらなかった。次いで、東京都内のいくつかの大きな書店へ関連する書籍を探しにいった。そこでビックリ、気功が世間で結構話題になっていてテレビの番組にも取り上げられていたことは、少しは知っていたが、それこそごっそり棚に並んでいたのである。ただし、医学の専門書としてではなく、一般書の棚に並んでいた。読み始める

と、なかなか自分で納得できるような内容のものが、これまでに書かれていないことが判った。結局これまでに 200 冊をこえる本を読んだと思う。独善的な判断ながら、内容的にこんな程度のものでいいのかと思われるものから、物理学の専門家が量子力学的立場から説明し難解な数式が連なっていてチンプンカンプンのものまで玉石混淆に状態なのである。関連領域は、物理学・(超)心理学・(東洋)哲学・宗教・ニューサイエンスなどに及んでいた。しかし、さすがに現代医学との直接的関係で述べられているものは目に付かなかった。気が付いてみると、気に関する定期的な研究発表をしている研究会・学会も多数あることが判った。それなりに記録もあるのだが、医学中央雑誌に収録されていない。つまり小グループ内での報告で、医学中央雑誌に収録されるような定期行物には報告していないようなのである。どうも、発行部数の多い定期行物では、査読も厳しく、掲載受諾を最初から諦めて投稿しないでいる気配がある。

< 外気功の体験から現代医学をみると >

しかし、筆者の経験からすると、外気功には、現代医学・医療とは異なる人間に対する良い・好ましい影響を及ぼす効果があり、適応を選べば医療として応用できる可能性があると考えられ、現代医療を専攻する医療関係者にも関心を持ってもらいたいという願望があった。この考え方が、代替（代わりになる）相補（お互いに補う）伝統（関連の手法は、古くからのものが多い）的医療と呼ばれるものである。そこで、できるだけ一般的現代医学雑誌に、外気功を見る視座・視点として報告してきた。

外気功をいかがわしいとみる人がいるのは、十分承知しており、筆者自身もごく最近までそうであった。しかし、現在は、気功自体はいかがわしくない、ときに、いかがわしい気功士がいると返事することにしている。

ともかく、これまで経験してきた効果としては、先の閉塞性動脈硬化症の症状改善、尿管結石のショック波破碎後の排

出促進、進行乳癌の進展抑制などには現代医学的評価が得られたと考えている。生理痛の軽快、不眠の改善、肩こり改善、維持透析患者の関節痛・関節運動障害改善などにも効果があったが、これらは現代医学でも客感的な評価法がないので、説明ができないといわざるを得ない。

繰り返しになるが、人間の体には、現代医学で説明のできない、あるいは、関心も持たれていない事象が起きる可能性があるのである。このことは、現代科学に基づく医学の限界について気付かせてくれたものと考えている。